

トの便という点からは、採集年月日の月は英字より数字の方が楽だし、項目幅の節約という点からは、ピリオドは省いて差支えないだろう。

器官というのは標本に葉茎根果実のいずれがつかっているかを示したもので、薬学部としての利用の便宜のためである。こういう項目は親切で有用であるが、データ作りは思いのほか大変だったろう。私もこういう項目を作ったことがあるが、面倒でやりきれなかった。とくに花と実の区別はむずかしい場合が少なくない。項目データとして「\*」が用いられているが、これは「実」とか「花」とか、そのものをみれば意味がわかるようにした方がよい。というのは、この表には項目見出しがついているのでよいけれど、他の機器とデータを交換する際には見出しが伴わないことが多いので、レコードだけでは意味がわからなくなることがあるからである。

重複標本数は、同じ標本番号のシートがいくつあるかを示しているが、私は標本番号（シート番号）というものは標本を特定するためにあるもので、重複標本といえども別な標本番号がつけられているべきだと考える。採集番号（フィールド番号）ならば、野帳との対応をとり、重複品であることを示すことが目的なので、同じ番号で当然である。とくに薬学のようにどの標本からサンプルを取ったとか、三枚の内一枚が同定違いだったとかいうことをデータベース上で検出するときに、シートを特定する番号がないととても不便な思いをする。

以上は汎用データベースとしてみたときの感想である。白山の地域区分のような、特定の地域や目的のデータは、それぞれの便宜に応じて記号やコードを使うほかあるまい。いずれにせよ、人手

の足りない中を、標本整理やデータベース作りに努力されている皆さんに敬意を表したい。生物多様性だの自然環境保全だのが声高に叫ばれるにもかかわらず、その基盤である標本室というものには相変わらず陽が当たらないようだが、こういう地味な仕事を積み重ねることが、認識を改める一助となるだろう。私のように普通の植物の資料がほしい人間には、薬学部の野外実習の標本は非常に有用なので、続編を期待する。本リストは非売品であるが、内容はフロッピーディスクで利用できることである。希望者は御影氏に連絡することをおすすめする。（金井弘夫）

□細井幸兵衛：青森県野生植物目録 84 pp. 1994. みどり造園有限会社. ¥2,000.

絶滅の危惧が心配される野生植物種が数多い今日、各地の植物目録は分布の記録や実情を知る上で基礎ともなる重要な資料である。これをまとめるには、過去の文献に通じ、野外調査の積み重ねが必要である。しかも概要が判りかけた後も、少しでも完璧を期すために調査を続けたい心境にかられるのが常である。このような植物目録あるいは地方植物誌の必要性は今後ますます高まるに違いないが、誰でもおいそれとできるわけではない。分類学の知識よりも何よりも種を職別する鑑識眼が不可欠である。

1941年に村井三郎が著わした総目録以後、信頼に足る青森県の植物目録は出版されていない。本目録の著者は長年にわたり、各地に調査を続けられた。本目録は県産野生植物として2019種を記録する。種と種内分類群は著者の見解で採用されている。私にとって、レブニイワレンゲなど今後の検討に待つものも若干ある。（大場秀章）